

主 題：罪の誘惑からの勝利

聖書箇所：エペソ人への手紙 6章13－17節

「悪魔の策略に打ち負かされてしまうのは、悪魔のことなど全く考えてもいなかったからである。」と言ったのは、ロンドンのウェストミンスターチャペルで30年間に渡って牧会したロイド・ジョーンズ博士です。彼は続けて言います。「そういう人々は『私は救われたので全く心配ありません。私はキリストに信頼しているので目を覚ましていなくても構いません。キリストが私を見守っていてくださるからです。わたしはキリストに目を注いでいればいいのです。』と言う。彼らは敵を見張りもせず悪魔の策略について気にも掛けていない。それで彼らは悪魔の策略にかかって敗北するのである。」と。

先週から見てきているように、悪魔は確かに存在し様々な誘惑を為します。そして、忙しくクリスチャンを誘惑するのです。私たちクリスチャンが罪を犯すとき、そのすべてが悪魔に原因があるわけではありません。私たちの内にある罪の性質が罪へと駆り立てていくわけですが、サタンも誘惑を為すことが聖書に記されています。ペテロの手紙第一の5章を学んだとき、サタンは働いて、イエス・キリストを信じる信仰者たちが、神のおことばに逆らう考えを持つように働きを為すことを見ました。また、神のみこころに逆らうような生き方をして行くようにと働くことも見ました。

前回はマタイ4章から、イエスが悪魔から直接その誘惑を受けられたことを見ましたが、私たちはサタンのその誘惑のすべを知るところとなりました。サタンは神の真実さへ不信を抱かせます。二つ目は、神のみことばへの不信でした。三つ目は神のみこころへの不信です。いずれにしても、神に対して信頼を置かないように、神を愛して行かないように、罪を赦された喜びをもって生きないように、永遠のいのちをいただいたゆえの希望、そのような希望をもって生きないように、この世の様々なものに私たちの目を向けさせることによって、私たちの心をぐらつかせようと働く、そのようなことを見てきました。ペテロが「**あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。**」と言ったように、油断している者、間違った方向を向いている者、そのようなクリスチャンにサタンは働きを為すことを見ました。そのような機会をサタンは狙っているのです。神を信じていると言いながら、信じていない人と同じような罪の生活を選択して行くようにとサタンはクリスチャンたちを誘惑し続ける、だから、私たちは注意しなければならないということをこれまで学んできました。「**身を慎み、目をさましていなさい。**」と。

もちろんこのサタンの誘惑はクリスチャンにだけ起こるものではありません。イエスを信じていない人々にもそのような働きが為され続けます。サタンは偽りの父ですから、人々をだまして、神が備えられた救いを信じないように、そこに価値を見出さないようにと働き続けるのです。人々の目を盲目にして、すばらしい救いを見せないようにと働くのです。

そこで、エペソ人への手紙6章でパウロはこのように言いました。13節「**ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、**」と。彼が生きていた時代、今から約2000年前もすでに邪悪な時代だった、そして、2000年を経た今も確かに悪が蔓延っている時代です。世の中は決して良くなって行きません。最近のテレビニュースは私たちを落ち込ませるものばかりです。パウロはまた、別のところでこのように言っています。「**終わりの日には困難な時代がやって来る**」と。大変な時代になると言います。Ⅱテモテ3：1－5を見ましょう。「**終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。：2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、：3 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、：4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、：5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。**」

今まさに私たちのこの時代をここに見ているわけです。人々の心はどんどん冷たくなって他の人なんかどうでもいいと思ひ、世の中の暴力はもっとエスカレートして行きます。神はこのように言われているのです。神の審判が近づくにつれてそのような時代になって行くと言います。私たちは今まさにその時代にいると言っても過言ではないでしょう。このような時代に私たちはどのように生きるべきなのか、13節を見ると、「**邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。**」。そのようなあらゆる誘惑や試みに対して勝利して行くことができるように、神の助けが必要だとパウロは言います。「**対抗できる…堅く立つことができる**」とこの「**できる**」という動詞は二つとも受身です。自分の力でできるのではなくて、だれかによってさせていただく、だれかの助けによってそれができるようになるというのです。すなわち、神の助けによって実現できる、つまり、大変な世の中だけれど、そのようなことに惑わされることなく生きて行くことがで

きるのだと言うのです。神の助けがあれば、とパウロが教えるのです。そのために必要なことは「神のすべての武具を取る事」だと言いました。パウロは面白い表現を使いました。「神の武具」、まさに兵士が身につけた武具がここにたとえで使われています。なぜこのようなたとえを用いたのでしょうか？パウロがこの手紙を書いた約2000年前、彼はローマで投獄されていました。彼を監督し監視する者はローマの兵隊でした。ですから、パウロは彼らの姿をいつも見ていたのです。兵隊たちは鎧を身に付け、かぶとをかぶって、刀をもって、いつでも戦いに出てゆく格好をしていたのです。彼らはいつ敵が攻めてきても自分の責任を果たせるようにと備えをしていました。その様子を見ていたパウロは、「私たちも同じではないか、彼らは敵に対して備えをなしているが、私たちクリスチャンも神の敵に対して備えをなすようにとすばらしい武具を備えてくださっている。だから、私たちもそれを彼らと同じように身に付けるべきだ」ということでこのようなたとえを使って、神がクリスチャンのために備えてくださった武具の説明をしようとするのです。

★クリスチャンが勝利を勝ち取るために必要な六つの武具

1. 真理 14節

14節「では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、」、ローマの兵隊たちは3種類の幅の広いベルトを持っていました。その中の1本を彼らは腰に巻きました。そこに剣を吊るして身支度をしました。ベルトを巻くことによって上着がしっかりと固定され自分の務めを果たして行けるのです。ですから、兵士としての務めのためにはこのベルトをしっかりと付けることは大切なことでした。パウロは言います。クリスチャンには真理の帯が必要だと。なぜなら、悪魔は偽りの父ですから、嘘でだまそうとします。悪魔の偽りに対して真理が最も効果的だから、真理をもって立ち向かいなさいと言うのです。偽りの誘惑に対して何が真理かを判断するためにしっかりと真理を知っておくことが必要です。神の真理、それは神のみことばです。今まで見てきたように、サタンの誘惑は「ほんとうに神はそう言われたのか？」でした。だから、神が何を言われているのかを学ぶことによって私たちはそのような誘惑に陥ることがないように、自らを守っていくことができるのです。真理をしっかりと身に付けること、それをパウロは教えるのです。同時に、帯をつけることはこれから自分の働きに就こうとすることです。ですから、私たちが真理を蓄えるだけではなく、その真理によって行動してゆくこと、生きて行くことが必要です。

「帯を締め」の「締める」というのは、用意ができていて、準備ができていてという意味です。何が正しいのか、何が神のみこころに合致しているのかを判断し選択して生きて行くことを教えるのです。悪魔はいろいろな誘惑によって私たちが幸せになるようにと招きますが、本当の幸せを与えることができるのは、それをもっておられる神しかおられません。神が何を望んでおられるのかを知るためには、この神がくださった聖書によるのです。真理は私たちに自由にし勝利を与えるのです。

2. 正義 14節

「胸には正義の胸当てを着け、」、「正義」とは義、あるいは正しいと訳されます。私たちがイエスを信じたとき、私たちは聖い正しい義なる神の前に立つことが許されますが、その救いのことではないのです。「義とされる」ことではありません。「胸当て」は自分の大切な心臓を守るために着けます。そして、ユダヤ人の間では「胸」「心臓」ということばは「心、意志」を表わすのです。また、「腸」は感覚の源であるとしてしました。ですから、パウロが比喩的に「胸当て」を着けなさいと言ったのは、それによってあなたの心を、意志を、感情を守りなさいということです。悪魔が私たちのうちに働いて神に疑いを持たせようと誘惑する、だから、私たちは自分の心も意志も感情も守らなければならないのです。それがいつも正しい状態にあるように守るのです。だから、パウロがここで言うのは、救いのことではなく、救われた者として正しく生きて行きなさいということです。だから、鎧をつけて心を守る必要があると言うのです。私たちが罪を犯すときは、知らず知らずのうちにいろいろな情報を得て、それをやりたいと思い始めるからです。自分の意志に働きかけて行くのです。パウロは、あなたの心が、意志が、感情がいつも正しい方向に向くように、神に喜ばれる生き方をして行くようにと教えるのです。エペソ4:24-32を見てください。「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。:25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。:26 怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。:27 悪魔に機会を与えないようにしなさい。:28 盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。:29 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。:31 無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。:32 お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」。救われた私たちにば変化がもたらされるのです。

偽りに代えて真実を語る、その瞬間その瞬間に罪を告白して改めて行くようになること、正しい仕事をし、人の徳を養うことばを話すこと、そのような変化、新しい生き方が始まるというのです。

また、ローマ13：12-13には「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。：13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。」とあります。救われた私たちは新しい生き方をしようと神は命じておられるのです。テトス2：12にも「私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」とある通りです。

3. 福音 15節

「足には平和の福音の備えをはきなさい。」。腰の帯、そして鎧、次は履物です。この「平和の」と記されていることばは、別のところでは「平安」と訳されています。同じギリシャ語です。イエスを信じて罪赦されたなら、感謝なことに神との平和をいただきます。信じる前は神の敵でしたが、救いに与ったときサタンの敵となりました。だから、罪赦された者は神との平和を得たとローマ5：1にあります。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と。神と和解した者に神の平安が与えられることは神の約束です。これはクリスチャンに与えられた大きな祝福です。いろいろなことで不安が多くなってゆく世の中ですが、私たちは平安をもって生きて行くことができますのです。ヨハネ14：27に「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」とイエスは約束を与えてくださっています。だから、パウロは神の平安をしっかりとって生きて行きなさいと教えるのです。コロサイ3：15には「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。」とあります。

同時に、神の平安をいただいた私たちクリスチャンは、その平安を人々と分ち合って行くようにと教えられています。「備えをはきなさい」とあるのは行動することを教えています。このような神の平安をもっていない人々が余りにも多いから、この神にある希望を語って行くのです。病に苦しんでいる方々がたくさんおられますが、その中で気付かされる大切なことは、自分の力で何でもできると思っていたのが実はそうではないということです。私たちは自分の力の限界、自分が完全な者ではないと気付くまでなかなか神の前に助けを求めようとしないのです。しかし、自分の力で生きていてもそこに喜びや満足があるでしょうか？それは一時的なものに過ぎません。神はそのような私たちに、目を覚まして私たちに本当の渇き、必要を満たしてくださる方は、唯ひとり神しかいないのだということを教えるために、いろいろなことを通して気付かせようと働かれるのです。自分の弱さに気付くことが大切です。イザヤは言います。52：7「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。」そして、このみことばがローマ10：15に引用されています。「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれていますとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」と、神との和解のメッセージを伝えること、それが救われた者の大きな責任です。

イエスだけが神が私たちにくださった救い主です。宗教はいくらでも作り出すことができますが、私たちが造ってくださった神ご自身が私たちのために送ってくださった唯一の救い主はイエスです。使徒の働き4：12に「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」と教えています。サタンはあらゆる手を講じて、イエスに罪を犯させることによって救世主としての資格を剥奪しようとしてきました。しかし、イエスはそれに敢然と勝利され、彼だけが人類の歴史上罪を犯したことの無い唯一の正しい聖い人物であるゆえに、私たちの身代わりとなることができたのです。だから、私たちはこの救いの希望を伝えるのです。メッセージを語ることに於いて、神は私たちに励まし力を与えてくださるのです。

4. 信仰 16節

「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。」。ローマ兵が戦うときに彼らが使った「盾」は、直径が約60cm位の円形のものでした。右手に刀を持ち左手にその盾をもって戦ったのです。パウロがいう盾はこれではありません。彼らはもうひとつの盾を持っていました。それは高さが1.2m、幅が大体75cmの大きな長方形の盾です。この盾のことをいうのです。ですから、パウロは「大盾」と言いました。この盾の背後に自分の体を隠して身を守るのです。この盾をもつ者を戦いの最前線に立たせてその後ろに矢をもった人々が待機しました。そして、敵の矢が止んだときに攻撃をしかけるのです。このようなことからパウロは「信仰の大盾を取りなさい」と言います。火矢によって攻撃してくるからです。悪魔もそのような火矢によって誘惑してくるから、それに打ち勝つために信仰の大盾を使いなさいと教えるのです。大盾は木製ですが、その上

に金属や皮を張りました。皮は十分に水を浸み込ませておきます。それによって火矢を消すことができました。悪魔の火矢を消すのは信仰だということです。神への信頼、それが勝利へと導くのです。ローマ人への手紙4章にアブラハムについて記されています。4：19－22「**アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだも死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。：20 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、：21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。：22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。**」、アブラハムはなぜ神から喜ばれたのか、それは神が言われたことは必ずそうなると思っていたからです。その信仰によって悪魔の誘惑を打ち破ることができる、神への信頼がすべてに勝利をもたらすことをパウロは教えているのです。

5. 救い 17節

「**救いのかぶとをかぶり、**」、いろいろな誘惑があっても私たちは希望をもって生きて行くことができます。どのような希望か、それは救いの希望です。「かぶと」は私たちの頭を守ります。ですから、いろいろな惑わしに対して私たちは知恵を働かせるように、正しいことをしっかりと考えているように言うのです。エペソ2章を見てください。2：8「**あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。**」と救いのことが書かれていますが、これは過去のことです。私たちは「信仰によって救われた」のだと言います。そして、「神からの賜物です」と救いがどういうものかを教えています。私たちが良いことをしたから、良い人間になったから神が私を救ったのではありません。救いを求めた者に神は救いをくださったのです。だから、神の救いは平等です。幼子でも寝たきりの人でもこの救いが理解できるなら受けることができるのです。もうすでに備えられているこの救いを信仰によって受けるなら、救われるのです。そして、救いはそれで終わりません。2：10に「**私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。**」と、現在のことが言われています。救われた者の生き方は変わってきます。良い行ないをするようにと変えてくださる、しかも、良い行ないは神が備えてくださると言います。救われた者はその生活が変わります。完璧ではありませんが、新しくされたゆえに新しい目標をもって生きて行きます。神は私たちのうちに働いて良い行ないをする者へと変えて行ってくださる、それがクリスチャンの日常の歩みであり、現在の救いなのです。同時に、ローマ13：11に「**あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。**」とありますが、これは罪が赦されるということではなく、私たちがこの罪のからだから解放される日が近づいているという未来のことを言っているのです。また、ピリピ3：20、21には「**けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。：21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**」、つまりイエスを信じた人には永遠のいのちが約束された、国籍を天に持つ者になった、そして、私たちはキリストが来てくださる日を待っている、それは、キリストと同じ姿に変えられるからだということです。私たちが神になるのではありません。キリストがそうであったように、罪を犯さない完全な栄光のからだをいただく、その日が来るということです。将来のことです。

ですから、救いを見たとき、イエスを信じて罪が赦されるという過去があり、日々変えられてゆくといい現在があり、そして、この罪のからだから解放されるという未来がある、これが救いだと言います。私たちはそのときをしっかりと覚えながら今日を生きて行なさいと教えるのです。救いの確信に不安を感じるようなとき、救いについて神はどのように教えているのかをもう一度学び、しっかりと確信を持つことです。

6. 神のことば 17節

「**また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。**」と、「神のことば」が聖書を指していることは明らかです。神のことばは自らを様々な誘惑から守るだけでなく、サタンに対する大きな武器でもあると言います。というのは、マタイ4章で見たように、イエスがサタンの誘惑を受けたとき、神であるゆえの神の力をもってサタンを打ち破ったのではなく、私たちの模範として、みことばをもって勝利されました。私たちがみことばによって打ち勝つことができると言います。なぜなら、神のことばは生きていて力があるからです。ヘブル4：12「**神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。**」。

また、人々のうちに働いて、人々のうちに罪を示し、救いの必要を示し、悔い改めへと導いて行くのです。このようなわざを為すのは神のことばです。人間のことばではありません。だから、私たちに課

せられている働き、私たちがすべきことは、私たちの巧みなことばではなく、力ある神のみことばを正しく語ることです。それによって神がみわざを為して行かれるのです。ですから、クリスチャンは正しくみことばを学び、正しく語ってゆくことが大切なのです。自分の信仰を守るためにみことばは力があります。同時に、みことばによって神はご自身のみわざを為して行かれるのです。こうして悪魔に立ち向かってゆくと教えるのです。

エペソ人への手紙を見たとき、「クリスチャンの歩み」がテーマとして教えられています。召しにふさわしく歩みなさい、救われた者にふさわしく歩みなさい、愛のうちに歩みなさい、光のこどもらしく歩みなさい、賢い人のように歩みなさい、とこのような正しい生き方のために必要なものがこれら神の武具であることをパウロは私たちに教えるのです。この武具によって様々な誘惑をなすサタンに打ち勝って行く、神の助けによって勝利して行くことができると教えるのです。